日本近代文学作品选读

李洪学　曹志明　编著

黑龙江大学出版社

责任编辑：孟庆吉

封面设计：那志宇

ISBN 978-7-81129-017-2

9 787811 290172 >

定价：28.00元

日本近代文学作品选读

李洪学　曹志明　编著

黑龍江大學出版社
HEILONGJIANG UNIVERSITY PRESS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

图书在版编目(CIP)数据

日本近代文学作品选读/ 李洪学,曹志明编著. —哈尔滨: 黑龙江大学出版社, 2007.11
ISBN 978-7-81129-017-2

Ⅰ.日… Ⅱ.①李… ②曹… Ⅲ.文学-作品-简介-日本-近代 Ⅳ.I313.064

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2007)第 164120 号

责任编辑 孟庆吉
封面设计 那志宇

日本近代文学作品选读
RIBEN JINDAI WENXUE ZUOPIN XUANDU
李洪学 曹志明 编著

出版发行 黑龙江大学出版社
地　　址 哈尔滨市南岗区学府路 74 号　　邮编 150080
电　　话 0451-86608666
经　　销 新华书店
印　　刷 哈尔滨海天印刷设计有限公司
版　　次 2007 年 11 月 第 1 版
印　　次 2007 年 11 月 第 1 次印刷
开　　本 880×1230 毫米 1/32
印　　张 8.875
字　　数 176 千
书　　号 ISBN 978-7-81129-017-2

定　　价 28.00 元
凡购买黑龙江大学出版社图书,如有质量问题请与本社发行部联系调换
版权所有 侵权必究

前 言

本书选收日本近代著名作家的代表作10篇，编为10课，按作品发表的时间排序。所选作品短篇为全文，中、长篇为节选。节选作品前面加有故事梗概。为了便于学生预习和自学，每课除正文外，还附有词语注释、作者简介、作品解说等。词语注释主要是为作品中出现的难读、难懂的词语标注读音，解释意义，并说明在该作品中的含义；作者简介包括作者生平、在日本文坛的地位和影响、主要著作简析等；作品解说包括发表的时间，写作的背景，主题思想等。

在日语教学中，日本文学作品选读教学具有十分重要的意义，它可以和语言教学相辅相成但又有自己的特点和任务。通过对日本文学名著的学习，在掌握一些研究日本文学方法的同时，还能加深对日本社会的了解，进一步提高日语水平。对日语语言文学专业的学生来说，日本文学作品选读课是一门重要课程。本书选收的作品均在黑龙江大学日语专业日本文学作品选读课中讲授过，取得了良好的教学效果。

本书可供日语专业本科三、四年级学生使用，同时也可作为日本文学爱好者学习和研究日本近代文学的参考资料。

本书在编写过程中参考了一些相关的国内外文献与

资料。主要参考书目附于书后，在此谨向各位编著者致以衷心的感谢。

本书的编写得到黑龙江大学东语学院领导的大力支持，黑龙江大学出版社的责任编辑同志也为本书的出版付出了极大努力，在此一并表示感谢。

由于作者水平有限，缺乏经验，书中难免存在不当和错误之处，敬请读者批评指正。

编者

2007 年 11 月

目　次

日本近代文学概観 1

本文 7

浮雲 9
舞姫 36
こころ 67
羅生門 112
高瀬舟 135
城の崎にて 156
カインの末裔 173
暗夜行路 202
蠅 224
伊豆の踊子 243

参考文献 278

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本近代文学概観

日本の近代は、普通は明治維新から第二次世界大戦終結までの時代を指す。

1868年に成立した日本の明治新政府は、廃藩置県、身分制度の廃止、学制の発布、太陽暦の採用など近代化を急ぎ、急速な欧化政策と富国強兵策を取ったため、いろいろな面で矛盾が生じた。日本の近代化について、夏目漱石は「現代日本の開化」という講演の中で次のように述べている。「西洋の開化（すなわち一般の開化）は内発的であって、日本の現代開化は外発的である。……外発的とは、外からおっかぶさった他の力でやむを得ず一種の形式を取るのをさしたつもりなのです。」明治の変革によって進められた日本の近代化は、ヨーロッパと違って、明治の絶対主義政権が選択せざるをえなかった政治のプログラムであり、「外発的」な近代化である。もちろん、日本国内部の必然的発展の過程でもあったが、ヨーロッパ先進国からかけられた圧力によることが大きかった。そこで、明治政府は欧米先進諸国の物質的、機械的文明を輸入し、産業をおこして軍備を充実することに専念していた。つまり科学技術などの物資文明の摂取に重点が置かれ、自我意識、個人主義を育成して、近代精神を確立していくことよりも、「富国強兵」というような

物的な力を増強することが第一とされたのである。特に中日甲午戦争と日露戦争によっていよいよ強国にされていった国家主義によって、個人の尊厳や自由が軽く見られる傾向があった。日本近代文学はもちろんそうした日本の特殊な近代化を反映している。

近代社会は市民社会である。市民社会の特色は自由主義的な民主主義精神によって貫かれていることである。この社会を動かす経済的機構は資本主義である。近代市民社会に生きる近代人は封建的な身分の拘束から解放され、あくまでも自由平等であり、ヒューマニズムを基本とした近代的自我に覚醒している。それで、近代小説は基本的に作者が遭遇した人生上の問題、作者の気づいた社会上の疑問など、作者自身を揺さぶる課題に突き動かされて書いているのである。この点が日本の近世の戯作と全く異なるところである。ここにまず、近代文学の特質を見ることができよう。

こういう作者の考え、ないし姿勢はやはり近代社会の形成、近代思想の成長の中で養われたもので、とくに自由主義、個人主義の思想に根差している。また、二十世紀に入って、自然科学が異常に発達したために、真剣な新しい人間の生き方の探求が盛り込まれるにいたった。それは科学思想に発した合理主義や真実への信頼に発しているからである。そこに、自己凝視とともに、自己主張への熱意が高まって、自己表現とそれにかかわる社会的な問題の追究の文学を生み出すこととなったので

ある。

ところが、日本の近代は封建性や国家主義、軍国主義などの強固な規制が働いており、容易にこれらの自由主義や個人主義の伸張を許さない状態であった。そこでいったん目覚めたこれらの人間的な叫びは十全な発揚を阻まれて、敗北の悲劇的な結末をみせたり、わずかに官能などの一部の解放に充足を見出したりするような、ゆがんだ様相を見せるようになった。また個性を生かす十分な解放が望まれないところから、あきらめの詠嘆を生じ、内部に屈折した感傷的な叙情の色調をもつような私小説が生れた。また対社会的視野をもって、自己の伸張を追求する文学もあった。

もちろん、近代文明の原初的成立は必然に下からの近代化を促す。しかし、日本の場合は上からの近代化で、体制自体に文化の近代化を促す論理が欠落している。日本近代文学を生むべき母胎としての日本近代社会自体が文学の近代化を阻害する負の価値として機能したという事実の中に見出される。二葉亭四迷の「浮雲」において早くも顕在化したように、日本の近代文学は、その母なる「近代」をたえず批判し、否定する存在として自己を確立しなければならないという逆説を逃れがたい十字架として追い続けたのである。一方では、西欧文明と接触した日本人の心性、その固有の美意識や感受性がおのずからに選択を強いられた「表現」の質の問題がある。キリスト教文化圏に生い育った西欧の文化と、仏教や儒教を根幹とする東洋文

化は、ついに折れあわぬ異質性を介在させている。その異質を越え難い断層として抱え込みながら、明治の作家は西洋を受容するための苦闘を強いられたのである。明治の幸田露伴、泉鏡花、また有名な知識人作家の夏目漱石なども、日本ないし東洋的美意識やその思想、倫理、感受性などに固執して、西洋の近代を阻んだのである。大正の作家にもその反近代の相が見出される。たとえば芥川龍之介における俳句や佐藤春夫における漢詩、志賀直哉の詩的な「話らしい話のない小説」にその具現した東洋的詩精神に脱帽したという事実も否定できないのである。しかし、日本の近代文学はあくまでも一箇の総合として存在する。だから、重要なのはその反近代が日本の近代と単純な並立ないし対立関係に置かれているのではなくて、両者が一体不可分な形に癒着して、つまり近代が反近代を内包して成立していたところにある。たとえば明治四十年代に夏目漱石が文明開化批判に転じた時、彼の信じていたのは東洋的思想であったか、その美意識であったか、すくなくとも夏目漱石の批判があるべき近代の理念に照らして、いわば日本の近代の彼方にある西洋との対照においてなされているかに見えて、実は彼の拠って立つ思想や美意識の根拠は、彼の内奥に潜む「古さ」、反近代の感覚によって支えられていたはずである。

日本の奈良・平安の文学が貴族の文学であり、鎌倉の文学が武士の文学であり、江戸の文学が町人の文学である。近世文学の場合、知識人の文学である和歌・漢詩のほかに、庶民の文学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

である小説、いわゆる戯作がある。日本古来の文学精神を「まこと」「幽玄」「さび」ということに対して、近代の文学は、個人を追究して人生の「真」を求めようとする文学精神であるということができる。

日本の近代文学は明治維新以後第二次世界大戦終結までの約 80 年の文学である。明治時代は日本近代文学の形成と展開の時代である。明治文学は西欧文学の強い影響を受けながら、新しい日本近代文学としての性格を形成し飛躍的な発展をとげた。大正時代は近代文学の成熟の時代である。大正文学は新しい芸術主義の考えやヒューマニズムの思想を中心として、多様な展開を示した。昭和（戦前）時代は革命の文学と文学の革新の時代である。昭和（戦前）文学は戦争の激化による不幸な状況に耐えて、戦後文学の復活へつながっていく。

本文

浮雲

二葉亭四迷

〈梗概〉十月二十八日の午後、役所の退庁[1]時刻に、二人の青年が神田見付から姿を現した。一人はその日突然役所で免職を言い渡された内海文三[2]、一人は逆に昇進[3]さえした本田昇である。文三は静岡に老母がいるが、子供の頃から叔父の家に寄宿して従妹のお勢と親しみ、今では結婚も当然と見られるようになった相愛の間柄である。しかし、免職と聞いて落胆[4]した叔母が文三に辛く当たるようになると、信じきっていたお勢[5]の言動まで変化し始め、我が物顔[6]に出入りするようになった昇を叔母もお勢も歓待[7]して、文三は一人きりの孤立の闇の中に立っている自分を見出すことになった。以前には思ってもみなかった世界の異様な変貌の意味を問い続けながら、錯乱のうちに文三は発狂寸前まで追い詰められていく。

第九回　すわらぬ肚

今日は十一月四日、打続いての快晴で空は余残なく晴渡ッて[8]はいたが、憂愁ある身の心は曇る。文三は朝から一室に垂れ籠めて、独り屈托[9]の頭を疾まし[10]ていた。実は昨日朝飯の時、文三は叔母に対って、一昨日教師を番町に訪うて身の振方[11]を依頼して来た趣を縷縷[12]話し出したが、叔母は木然として情寡き者のごとく「へー」ト余所事に聞流し[13]ていてさらに取合

わなかッた、それが未だに気になって気になってならないので。

一時頃に勇が帰宅したとて遊びに参ッた。浮世の塩を踏まぬ身の気散じさ[14]、腕押し[15]、座相撲[16]の噺、体操、音楽の噂、取締りとの議論、賄方[17]征討の義挙から、試験の模様、落第の分疏[18]に至るまで、凡そ偶然に懐に浮んだ事は、月足らずの水子思想[19]、まだ完成ていなかろうが如何だろうが其様な事に頓着[20]はない、訥弁[21]ながら矢鱈無性に陳べ立てて返答などは更に聞いていぬ。文三も最初こそ相手にも成ていたれ、遂にはホッと精を尽かして仕舞ひ、勇には随意に空気を鼓動さして置いて、自分は自分で余所事を、と言ッた所がお勢の上や身の成行で、熟思黙想しながら、折々間外れな溜息噛交ぜの返答をしていると、フトお勢が階子段を上ッて来て、中途から貌のみを差し出して、

「勇。」

「だから僕ア議論して遣ッたんだ。ダッテ君、失敬じゃないか。『ボート』の順番を『クラッス』（級）の順番で……」

「勇と言えば。お前の耳は木くらげかい。」

「だから何だと言ッてるじゃないか。」

「綻を縫ッてやるからシャツをお脱ぎとよ。」

勇はシャツを脱ぎながら、

「『クラッス』の順番で定めると言うんだもの。『ボート』の順番を『クラッス』の順番で定めちゃア、僕ア何だと思うな、僕ア失敬だと思うな。だって君、『ボート』は……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com